

調査研究事業を通して

沖縄県立総合教育センター
 学校支援総括 大濱 裕司

去る2月6日に本センター主催の研究発表会を開催した。県内各地から300名余の参加があり盛り上がる発表会となった。

調査研究事業は、教育の今日的思潮の動向を見据え、学校教育上の当面する諸問題に関し全所体制で取り組む事業であり、この発表会は1年間の研究成果を外部的に報告する場となる。今年度もプロジェクト研究と個人・共同研究13本の報告を行う事が出来た。プロジェクト研究は平成21年度から『確かな学力』を育成する研究」とし継続的な研究を続けている。当初は地域との連携や出前講座の実施を通して学校支援のあり方を中心に研究が進められており、近年は授業づくりに焦点をあてた研究が主である。その研究のベースとなるのは全国学力・学習状況調査の分析から得られる本県独自の課題である。今年度も、全国平均や秋田県との比較を行っており、その中で様々な傾向を分析している。

今回気付いた教師側の課題がある。例えばある項目について「指導を行っているか」という問いに対し、肯定的な回答（行っている。ほぼ行っている）はさほど変わらないものの、最も肯定的な回答（行っている）では差が出ているパターンである。分析を進める中で、要所でこの傾向を示すデータに遭遇した。つまり、指導について改善傾向は進んでいるが、指導の徹底度に差があるのではないかということである。言い換えると、学力向上の取組についてある程度の手応え、見通しは以前に比べ進んでいる。しかし、学校全体での課題の共有や、取組の徹底、継続する姿勢については、課題があるのではないかということである。これ

までの取組の成果が確認できたと同時に新たな課題が見つかった事になる。その課題解決には発表会当日に行った秋田大学の阿部昇教授の講演が参考になる。講演では秋田県のトップクラスの要因の一つとして授業研究の日常化を話されていた。研究授業はもちろん教師間で日頃の授業を見せ合い、常に授業の話・子どもの話が交わされる職場環境が秋田にはあるというのだ。それを参考に考えると、何か特別なことを始めるというのではなく、日頃の取組について、常に意識するということによって日常化は図れ、課題の解決に繋がるのではないだろうか。つまり、学校全体で、「意識の日常化」を行うことにより、課題の共有や、取組の徹底、継続する姿勢が図られると考える。

沖縄県の教師の資質能力は年々高まっている。長期研修や初任者研修等での先生方の熱心に学ぶ姿勢を通して感じる事だ。だからこそ、個々の力をチームとして機能させるためにも学校全体での取組が日常化されることを目指したい。

沖縄県は平成22年に沖縄21世紀ビジョンを策定した。概ね2030年の沖縄のあるべき姿を見据えたものだ。その中で「海邦養秀」の拠点形成として人材育成の必要性が述べられている。「海邦養秀」は琉球国王尚温が国学を創建した際に扁額に掲げた言葉であり、自国の人材育成の気概が込められている。当然のことながら、本センターの役割は、沖縄の幼児児童生徒の実情を的確に把握し、本県の教育課題を認識し、独自の研究に従事する必要がある。その点においても、このような調査研究事業を通して沖縄県の教育課題の解決について取組み、中心的役割を果たさなければならない。

***** も く じ *****		
●巻頭言 「調査研究事業を通して」		- 1 -
●平成27年度「プロジェクト研究」について	～教科研研修班～	- 2 -
●大自然が心を開く機会に！自然体験キャンプ	●第2回特別講演会について	～教育経営研修班～ - 3 -
●親子で体験「夏休みおもしろ科学教室」	●自主講座「小学校理科講座」	～理科研研修班～ - 4 -
●知っていますか？インシデント・プロセス法	●「ことばを育てる」って？	～特別支援教育班～ - 5 -
●「スキルアップ講座」大盛況！	●進路相談支援システムが7月に新しくなります	～IT教育班～ - 6 -
●H27生徒実習・出前講座・施設見学・支援講座の状況	●新規導入機器の紹介	～産業教育班～ - 7 -
●後期・一年長期研修員研究報告会	●研修を終えて	●平成28年度センター事業説明会のご案内 - 8 -

平成27年度「プロジェクト研究」について

教育センターの調査研究事業のひとつであるプロジェクト研究は、教育センターの全ての班が共同して取り組む横断的な研究として位置づけられており、沖縄県の教育課題の解決に向けて取り組んでいます。今年度は研究テーマ『『確かな学力』を育成する研究』、サブテーマ「学力・学習状況等に関する課題分析と『探究型授業づくり』の取組を通して」として研究を進めました。

研究の目的は、①全国学力・学習状況調査の分析を通して本県の現状を把握し、課題を見出し、その解決策を探ること、②「児童生徒同士のつながり」「教師同士のつながり」「小学校と中学校のつながり」の3つのつながりの重要性を示し、それらを意識した学び合う集団の育成と教科の壁を超えた共同研究システムの構築、③「探究型授業づくり」に関する理論研究、実践研究の3点です。

まず、①について、学力調査の分析では、主な課題として「漢字の読み書き」「資料の読み取り」「説明すること」等があげられ、学校質問紙等の分析からは、教師の学習指導の課題として「目標提示の工夫」「目標に連動した振り返る活動の徹底」「言語活動の充実を図る活動」等があげられました。そこで、これら学力・学習状況に関する課題解決に向け「探究型授業づくり」を提案しました。この「探究型授業づくり」の具体的な取組については、③で後述します。

次に、②の「児童生徒同士のつながり」は、質の高い授業を展開する基盤であることとし、授業や授業以外でも「話し合う活動」を取り入れ、関わり合うことのできる学級集団を育成する実践事例を小学校国語と中学校特別活動で示しました。また、成果をあげている学校の共通点として「教師同士のつながり」があげられることから、このつながりを強化するために中学校における「教科の壁を超えた学習指導案検討会」を実践しました。教師同士が教科の壁を超え、気軽に授業について話し合い、授業改善に役立てることを目的としました。そこでの活発な議論は、実際の授業改善に活かされ、同僚性の高まりとともに、日々の授業改善に活かされたと考えます。「小学校と中学校のつながり」では、県内各市町村教育委員会の小中連携の取組状況を把握するための聞き取り調査を行い、その成果と課題点を示しました。今後の取組として、授業改善のための小中合同の学習指導案の検討など事前研究の可能性を示しました。

課題解決に向けた取組として、教育講演会（4回）の実施や秋田県の小学校・中学校・高校の視察などから、③の探究型授業を提案することとしました。探究型授業とは「児童生徒同士の活動に

重きをおいた探究する活動を取り入れ、児童生徒が主体的・協同的に学ぶことを意義づけた授業」とし、小学校国語と中学校数学で授業実践例を示しました。一時間の授業の中に探究する活動を位置づけ、他者と交流しながら、自分の考えを深めていくことを目指しました（図）。

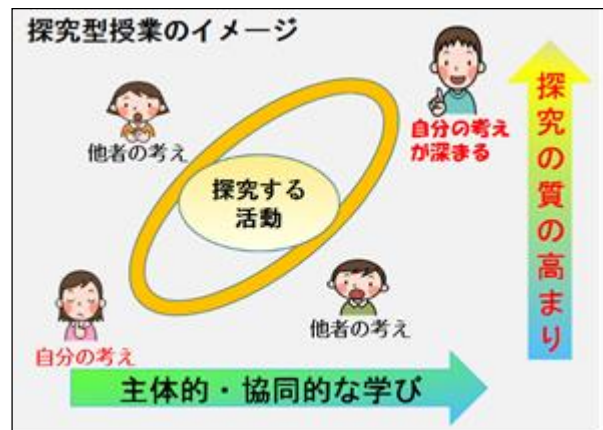


図 探究型授業のイメージ

小学校国語の実践では、自分の納得いく内容や表現を追究する活動を通して、他者と関わりながら自分の考えを再構築し、よりよい表現を目指す児童の姿が見られ（写真）、中学校数学では、既習事項を用いて試行錯誤しながら答えにたどり着こうとする生徒の姿が見られました。



写真 授業の様子（小学校国語）

今年度の研究の成果として、学力や学習指導の課題の把握と、課題を解決するための「探究型授業づくり」を提案し、中学校における「教科の壁を超えた学習指導案検討会」の実践例を示したこと等があげられます。

今後の課題として、児童生徒の考えを引き出し、思考を深めるためのさらなる授業改善に向けた取組の充実を図ってまいります。

教育センターは、沖縄県の児童生徒の「確かな学力」の育成に向けて、今後も先生方とともに取り組んでまいります。

大自然が心を開く機会に！ ～渡嘉敷島いきいき自然体験キャンプ～

平成 27 年 9 月 15 日から 3 泊 4 日の日程で「いきいき自然体験キャンプ～とかしき島の自然と仲間からのメッセージ～」が行われました。これは沖縄県適応指導教室連絡協議会と国立沖縄青少年交流の家の共催事業として毎年実施しているものです。県内の適応指導教室等に通級する児童生徒が、渡嘉敷島の大自然の中で、体験活動や宿泊活動等の「チャレンジ」を通して、自己の発見や成長のきっかけをつかむ場とすることを目的としています。実際の活動としては、テント設営、海洋研修、カヌーでの離島横断体験、プロジェクトアドベンチャー、野外炊飯体験等となっています。

今年は約 40 名の児童生徒が参加しましたが、親元を離れての 3 泊ものキャンプへの参加は想像以上にハードルが高く、日程の中でも仲間と打ち解けられず、モチベーションを保つのが難しい子もいました。しかし大自然の中で徐々に心を開き担任や支援員、交流の家の職員の方々、ボランティアスタッフの援助を受けながら、起床から就寝まで、身の回りのことを自分たちで行い、体験活動等にグループで協力して活動できるようになっていきました。野外炊飯では役割分担をもとに自分たちで材料を切り、火をおこし、食事を作ることでお互いに助け合う姿が見られ、3 日目に行われたハナレチャレンジでは、全員で 2 隻の大型カヌーに乗り込み、ハナレ島まで子ども達だけの力

で漕いで渡ることができました。チームのメンバーで声を合わせ、心を合わせ、一生懸命カヌーを漕ぎハナレ島に到着した時の達成感は大きかったようで、どの子もいきいきとした表情を見せていました。今年は最終日に地震による津波の影響で延泊を余儀なくされましたが、最終日は笑顔で渡嘉敷島を後にすることができました。

参加後のアンケートによると、多くの児童生徒の自己肯定感や有用感が高まっており、適応指導教室内の活動に積極的に参加するようになったり学校へのチャレンジ登校や苦手な教科にも挑戦するようになったりと、意欲的に変容している様子が見られています。

多くの適応指導教室で、このキャンプが学校復帰に向けたきっかけづくりや、子ども達の自信回復、成長に大いに役立っています。



離島へのカヌー横断体験の様子

平成 27 年度 第 2 回特別講演会について

平成 28 年 1 月 7 日（木）15:00～17:00 の日程で平成 27 年度第 2 回特別講演会が県立総合教育センター本館 3 階講義室にて行われました。

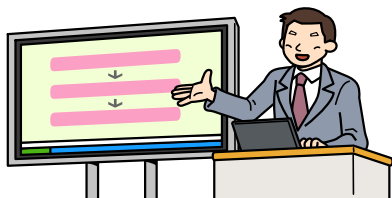
講師は、嘉手苺 孝夫 氏【一般財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー 専務理事】で、「沖縄県の観光産業の現状と望まれる人材育成」という演題で、講演がすすめられていきました。

最新のデータや御自身の体験談、ユーモアと情熱を交えた意義深い御講演でした。特に受講者の

声として「様々な気づきや視点」「外の世界に出ることの大切さ」「観光資源の価値は外からの視点導入」「雇用との関係性」等、多くの示唆を与えて頂いたとの感想が寄せられました。



講演会の様子



大自然が心を開く機会に！ ～渡嘉敷島いきいき自然体験キャンプ～

平成 27 年 9 月 15 日から 3 泊 4 日の日程で「いきいき自然体験キャンプ～とかしき島の自然と仲間からのメッセージ～」が行われました。これは沖縄県適応指導教室連絡協議会と国立沖縄青少年交流の家の共催事業として毎年実施しているものです。県内の適応指導教室等に通級する児童生徒が、渡嘉敷島の大自然の中で、体験活動や宿泊活動等の「チャレンジ」を通して、自己の発見や成長のきっかけをつかむ場とすることを目的としています。実際の活動としては、テント設営、海洋研修、カヌーでの離島横断体験、プロジェクトアドベンチャー、野外炊飯体験等となっています。

今年は約 40 名の児童生徒が参加しましたが、親元を離れての 3 泊ものキャンプへの参加は想像以上にハードルが高く、日程の中でも仲間と打ち解けられず、モチベーションを保つのが難しい子もいました。しかし大自然の中で徐々に心を開き担任や支援員、交流の家の職員の方々、ボランティアスタッフの援助を受けながら、起床から就寝まで、身の回りのことを自分たちで行い、体験活動等にグループで協力して活動できるようになっていきました。野外炊飯では役割分担をもとに自分たちで材料を切り、火をおこし、食事を作ることでお互いに助け合う姿が見られ、3 日目に行われたハナレチャレンジでは、全員で 2 隻の大型カヌーに乗り込み、ハナレ島まで子ども達だけの力

で漕いで渡ることができました。チームのメンバーで声を合わせ、心を合わせ、一生懸命カヌーを漕ぎハナレ島に到着した時の達成感は大きかったようで、どの子もいきいきとした表情を見せていました。今年は最終日に地震による津波の影響で延泊を余儀なくされましたが、最終日は笑顔で渡嘉敷島を後にすることができました。

参加後のアンケートによると、多くの児童生徒の自己肯定感や有用感が高まっており、適応指導教室内の活動に積極的に参加するようになったり学校へのチャレンジ登校や苦手な教科にも挑戦するようになったりと、意欲的に変容している様子が見られています。

多くの適応指導教室で、このキャンプが学校復帰に向けたきっかけづくりや、子ども達の自信回復、成長に大いに役立っています。



離島へのカヌー横断体験の様子

平成 27 年度 第 2 回特別講演会について

平成 28 年 1 月 7 日（木）15:00～17:00 の日程で平成 27 年度第 2 回特別講演会が県立総合教育センター本館 3 階講義室にて行われました。

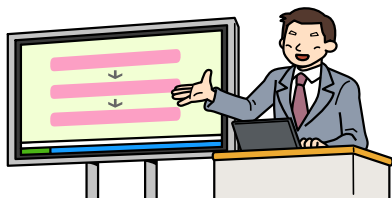
講師は、嘉手苺 孝夫 氏【一般財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー 専務理事】で、「沖縄県の観光産業の現状と望まれる人材育成」という演題で、講演がすすめられていきました。

最新のデータや御自身の体験談、ユーモアと情熱を交えた意義深い御講演でした。特に受講者の

声として「様々な気づきや視点」「外の世界に出ることの大切さ」「観光資源の価値は外からの視点導入」「雇用との関係性」等、多くの示唆を与えて頂いたとの感想が寄せられました。



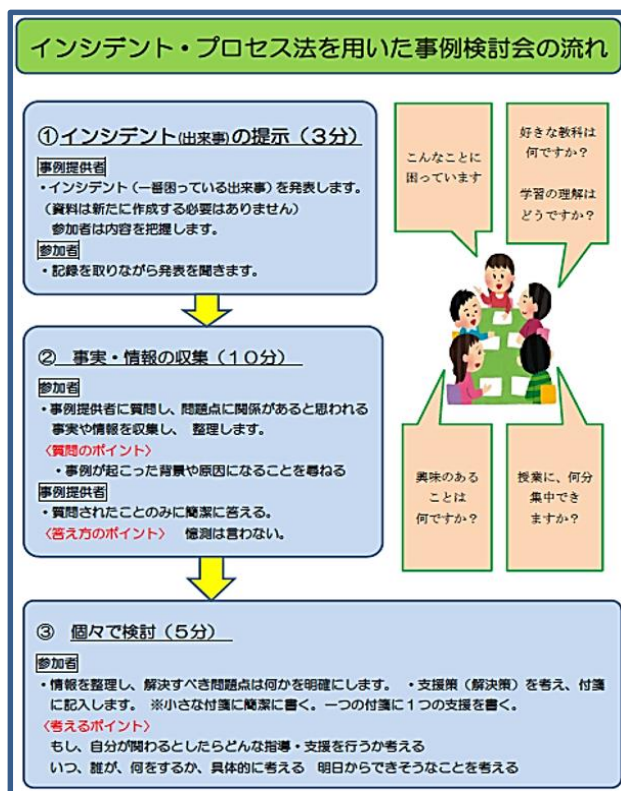
講演会の様子



知っていますか？インシデント・プロセス法

質疑応答もなく、助言者の助言を聞いて終わってしまう会議。そんな会議ではなく、参加者一人一人が当事者の立場で考え、主体的、積極的に取り組み、実践に役立つ対応方法（解決策）を学ぶことができる会議の方法がインシデント・プロセス法です。インシデント（実際に起こった出来事）をもとに、参加者が事例提供者に質問することで出来事の背景や原因となる情報を収集し、問題解決の方策を考えていく方法です。インシデント・プロセス法を取り入れた事例検討会で期待される効果として次のことがあげられます。

- 検討会で用いるための資料を新たに作成する必要がないため、事例提供者の準備の負担が少ない。
- 参加者一人一人が当事者の立場で考えられるので、主体的、積極的な研修ができる。
- 実際の出来事を基に、問題を参加者全員で共有することができる。その結果、チームでの解決の仕方と、実践に役立つ対応方法（解決策）の2つを学ぶことができる。
- 事例について、事実（実際の出来事）に関する質疑応答がなされるので、事例提供者の対応への批判になりにくい。



※学校で取り組みやすい「30分程度で取り組める流れ」が、県立総合教育センター特別支援教育班HPにあります。是非、ご覧ください。

「ことばを育てる」って？～県外学校の視察から～

ことばを育てるためには、ことばをたくさん聞くことが大切です。ことばをたくさん聞くことで、語彙力が高まり、話す力・書く力も高まります。そのためには、まず、私たち大人が正しいことばをたくさん話すことを通して子どもの言語環境を整える必要があります。

それでは、聞こえに課題がある、聴覚に障害のある子供は、どうでしょうか。聴覚に障害のある子供は、手話で会話を行うことができますが、文章を読み書きするためには、日本語の理解が大事になります。ここで、「日本語の理解？当然日本語はみんなわかるでしょう」と思われた人もいると思います。聴覚に障害のない子供は、ことばを生まれ育った環境の中で自然に聞いて意味づけをし、覚えることができます。しかし、聴覚に障害のある子供はそうはいきません。音とことばを一致させ、意味づけをすることが難しいため、漢字の読み書きや文章の読解・表現が苦手になる傾向があります。そのため、聴覚障害の状態を把握し、できるだけ早い時期から補聴器を装用し、聞こえの保証を最大限に行うことで、ことばをたくさん聴ける環境を整えることが重要になってきます。

今回、視察を行った私立日本聾話学校は、聴覚に障害のある幼児児童生徒が在籍している学校で

す。日本聾話学校では、子供の残存する聴覚を最大限に活かし、ことばを獲得するための意欲を育て、ことばのやりとりを通して学校生活の全体の中で、学習に結びつける実践が丁寧に行われていました。そのために、補聴器の調整を毎日行うなど、ことばの聞こえの保証をするための環境を整えることを確実にやり（基礎的環境整備）、個に応じた支援を行っていたことが印象的でした。

現行学習指導要領の要点である「言語活動の充実」は、どの学校においても行わなければなりません。その言語活動の充実を支えるためには、就学前の幼い時期からことばを話したい、聞きたいという意欲を子供との信頼関係の基に育てる必要があります。このような経験の積み重ねが読む力、書く力となって学力に結びついてきます。

先ほどの日本聾話学校では、教師は子供の話を傾聴し、話したい・伝えたいという意欲を育む教育に力を入れていました。このことは、障害のあるなしにかかわらず、ことばを育てることに確実につながるだろうと感じました。

みなさん、学校でも家庭でも「話したい・伝えたい」という子供の意欲を育てるためにできること「聞いてあげる・問い返す」という環境を意識してみませんか。

「スキルアップ講座」大盛況！

平成 27 年 9 月より、「スキルアップ講座」として、平日 (18:30～20:30) と土曜日 (8:30～12:30) に、タブレット端末活用や Excel 初級、ネットワーク初級などの講座を行いました。

講座を始めたきっかけは、夏期短期研修で応募者が多く、研修を受けられない先生方がいたため、放課後や休日の研修を企画しました。

特にタブレット端末活用講座については、小中学校で導入が始まっていることや学習に効果があることから、これから取り組んでみたいと意欲のある先生方が多く参加していました。

講座の内容は、タブレット端末の基本的な使い方から、アプリをダウンロードする方法、プロジェクトや大型テレビに映し出す方法など、すぐに活用できることに絞り込んで行いました。

参加した先生方からは、分かりやすい内容で時間を十分に取れ、集中して研修を受けることがで

きたという感想が多く聞かれました。

平成 27 年度の取り組みの様子から、28 年度もスキルアップ講座を実施できるように進めていきます。



「進路相談支援システムが7月に新しくなります」

県立高校 60 校で利用されている進路相談支援システムが平成 28 年 7 月に新しいシステムに生まれ変わります。進路相談支援システムは、学校における出席・成績管理を中心に、卒業処理や指導要録・調査書などの出力を行う校務の基幹システムです。県立高校の教職員にとっては、生徒の出席入力、成績入力、通知表作成などで、通常の業務及び学期末、学年末に利用する身近なシステムと感じていることでしょう。この進路相談支援システムに加え、平成 24 年から、各県立高校へ提供している Sa.net (グループウェア) の機能を包含し、新しい進路相談支援システムを平成 26 年度に構築しました。平成 27 年度には 5 高校 (北中城、真和志、陽明、那覇工業、泊) にて先行稼働していただき、検証を行いました。

現在の進路相談支援システムは平成 13 年 12 月から開発し、平成 14 年 4 月から 8 月にかけて検証を行い、平成 14 年 9 月に全県立高等学校に提供を始めてから、10 年以上使われているシステムです。これまで、単位制高校 (真和志高校) に対応するための機能追加を行いましたが、定時制課程、通信制課程については未対応のままでした。

今回生まれ変わる進路相談支援システム (新システム) では、従来の全日制課程、単位制課程に加え、定時制課程、通信制課程、総合学科に対応します。そのため、新システムでは、これまで手書きで指導要録・調査書の作成を行っていた定時

制課程、通信制課程の各学校へ導入することが可能となり、より多くの職員の校務における負担軽減が図られるものと期待しております。

新システムの構築・検証については、平成 27 年 8 月にシステムのテスト環境を各学校に公開し、同年 12 月までに要望を集めました。今回は集めた要望を可能な限り盛り込む事ができました。今後も、校務で安全かつ安定的に運用していけるよう取り組んでいきます。

現在、進路相談支援システムを稼働させているサーバが各学校に 1 台設置されているのですが、そのサーバのリース期間が平成 28 年 6 月で切れることとなります。そのため、新しいサーバが各学校に導入される平成 28 年 7 月の時期を利用して、新システムの導入となります。年度途中でもあり、かつ 1 学期末の成績処理の繁忙期に、システムの入替えとなりますが、各学校においては、進路相談支援システム担当者を中心に、スムーズに移行できるよう御協力をお願いします。



H27年度 生徒実習・出前講座・施設見学・支援講座の状況

産業教育班（産業技術教育センター）では、専門学科の生徒を対象とした高度情報機器や先端技術装置を活用した生徒実習事業を実施しており、今年度も3,248名が実習を行いました。また、小・中・高の児童・生徒・教職員を対象とした出前講座607名、施設見学657名、産業教育支援講座114名受け入れており、生徒実習と合わせると4,626

名の児童・生徒・教職員が産業教育について学んできました（3月31日現在）。

H28年度も多くの子・生徒・教職員に、産業教育について学び、職業観・就業観の育成やキャリア教育の推進につながる支援を行っていききたいと思っております。

生徒実習	①光合成蒸散測定	⑪人口宝石加工	⑫空気圧制御
	②作物栽培技術	⑫5軸加工機	⑫測量実習
	③ハチ（植物・動物）基礎講座	⑬CAD/CAM技術	⑬映像編集技術
	④複合環境制御技術	⑭ウォータージェット加工技術	⑭画像処理技術
	⑤各種元素分析	⑮ビジネスシミュレーション	⑮Webプロダクシング
	⑥糖・有機酸・アミノ酸分析	⑯デジタル素材編集	⑯ネットワーク技術
	⑦質量分析	⑰アプリケーション活用	⑰3Dモデリング
	⑧各種ビタミン分析	⑱ループ素材編集型作曲ソフト	⑱マルチメディアコンテンツ制作
	⑨土壌・植物・水質分析	⑲シーケンス制御	⑲3DCG
	⑩NC工作機械技術	⑳マイコン制御	



測量実習の様子(生徒実習)

出前講座	教科等	講座名(内容)	校種	対象
	農業 工業 商業	○「確かな学力」を育成する授業づくり ・言語活動の充実を図る授業 ・授業改善、授業づくりの基礎・基本	高	教員
	農業 工業 商業	○スキルアップ講座 ・専門的な知識・技能の向上を図る ・実践的な実習・演習の進め方	高	生徒 教職員
	総合的な 学習の時間 体験学習	○草花の栽培と緑化 ・観察力や計算力、環境緑化について学ぶ ・草花の栽培に関する実験や実習	小 中 高	児童 生徒 教職員
	総合的な 学習の時間 体験学習	○ネームプレートを作ろう（センター施設利用） ・レーザー加工機を用いたものづくり体験 ・先端技術機器の体験	小 中 高	児童 生徒 教職員
産業教育支援講座	総合的な 学習の時間 体験学習	○キャリア教育への支援 ・栽培、食品加工、制御、マルチメディア、機械工作、ビジネスの技能を活用した職業観の育成	中 高	生徒 教員



ネットワーク技術の様子(生徒実習)



田植えの様子(出前講座)

産業教育支援講座	教科等	講座名(内容)	校種	対象
	工業	○ウォータージェット加工技術講座 ・ウォータージェット加工のデータ作成について ・ウォータージェット加工機の取扱について	高	教員
	工業	○MAG溶接技術講座 ・MAG溶接機の仕組み、取り扱いについて	高	教員
	工業	○技能検定対策講座 ・スマートデバイスを活用した技能検定指導対策	高	教員
	工業	○電子回路組立技術講座 ・電子回路組立技術に関する基盤製作、及び制御プログラムについて	高	教員
産業教育支援講座	商業	○データベース実習講座 ・アプリケーションソフト（ACCESS）を活用したデータベース操作言語活用実習	高	生徒 教員



ビジネスマナーの様子(出前講座)



電子回路組立講座の様子(支援講座)

新規導入機器の紹介「原子吸光光度計」「超高速液体クロマトグラフィー」

分析システム研修室に1月から新しい装置が導入されました。「原子吸光光度計」は生産した作物や食品の元素の定性・定量ができ、土壌中の元素も測定可能です。

「超高速液体クロマトグラ



原子吸光光度計

フィー」はアミノ酸や糖類の分析で使用します。また、ビタミン・クロロフィルや有機酸も測定できます。今後、生徒実習や教職員研修等で多くの活用が期待されます。



超高速液体クロマトグラフィー

平成27年度 後期・一年長期研修員研究報告会

平成27年度後期・一年長期研修員研究報告会が3月3日(木)～8日(火)の4日間の日程で、本センターで開催されました。今回は後期長期研修員34名、一年長期研修員21名の計55名が各自のテーマに基づき、教育課題解決のための意欲的で熱意の伝わる報告を行いました。また、又吉孝一センター友の会会長をはじめ、関係学校長や教諭等多くの方々の参加がありました。関係各位の激励を受け研修員一同、研究成果を十分に報告することができました。



研修を終えて



IT教育班
今帰仁村立今帰仁小学校
教諭 宮城 詩野

「さあ、今日から研修員、頑張るぞ!」と、心を新たに教育センターの門をくぐって早一年が過ぎようとしています。この一年間、私一人では研究を進めることが難しく、班長をはじめ、主任・主事の先生方、そして研修員の皆さまの支えがあってこそ、ここまですることができました。報告書の書き方から研究や授業の進め方、そしてまとめ方まで、親身になって細かな御指導をしてくださいました。検討会では、自分が気付かなかった見方や考え方など、様々な角度から御指摘をいただき、自分自身の未熟さを痛感するとともに、これからの実践に活かせるアドバイスも数多くいただくことができ、感謝の一言では言い表せないほどの気持ちでいっぱいです。研修期間中には、教育講演会や専門講座をはじめ各種講座等を受ける機会を与えてくださり、改めて教師としての使命感、研究と修養に努めることの大切さを振り返ることができました。また、IT教育班の研修では、専門の知識や技術をもった主事の方々からプログラミング講座やICTを活用した教材の作り方、授業改善法等を教授していただき、私のこれまでの教職生活の中で、かけがえない貴重な一年となりました。

話は変わりますが、皆さまの今年一年の抱負を漢字一文字で表すと、どんな漢字になりますか? 私は、今後も自己研鑽に邁進していきたいと考え、“挑戦”の頭文字をとって「挑」にしました。今後は、この一年間の研修を通して学んだ多くのことを学校現場へ還元し、教育活動に活かしていきたいと思ひます。



一年間、研修の機会を与えてくださった教育センターの皆さま、そして支えてくださった班長をはじめ、主任・主事の先生方、研修員の皆さまに深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



産業教育班
県立北部農林高等学校
教諭 河野 篤

学校を離れて、初めて、これまでの教員生活や授業について振り返り、悩み、考え、成長することができた1年でした。まず、研究テーマに不安を感じながら過ごした4月。それぞれの教育課題についてどう解決すればよいのか、パソコンに向かっていました。特に私は理論研究に苦労しましたが、多くの検討会を通して、

沢山のアドバイスをいただき、徐々に自分のやるべきことを見つけることができました。そうして迎えた検証授業では、生徒の変容を感じることができ、今までになかった充実感がありました。

また、朝の清掃に慣れた頃には、研修員同志の交流も増え、互いの検証授業を見学したことで農業・工業・商業、それぞれの学校での取り組みや課題を見ることができ、何よりも学校や生徒の違いを感じることができたのは、私にとってとても大きな経験となりました。こうした研修員同志の交流があったからこそ、これまでにはなかった気付きやヒント、新たな視点を発見し、研修が高まり、学び合うことができた実感しています。そして、ここで過ごした1年はとても貴重な機会となりました。

終わりに、所長をはじめ、本当に多くの主事の先生方には私たちの研修が成功するように導いて頂き、また、これまで傍で私たちの研究に親身になって接して頂いた産業教育班の班長、主任、主事の先生方の支えがあったから最後まで辿り着くことができました。感謝しています。今後もここで学んだ多くのことを継続できるよう、日々の実践活動に取り組み、生徒一人一人に確かな学力を育むよう授業の改善と評価の工夫に努め、専門的力量を高めていきたいと思ひます。

平成28年度 県立総合教育センター事業等説明会(御案内)

本センターが実施する学校支援、教師支援に関する事業等を周知し、理解を深めるとともに各教育機関や学校現場との情報交換を行うことで、本センターの充実と発展に資することを目的に実施いたします。

日 時：平成28年4月26日(火) 場 所：県立総合教育センター 多目的研修棟